3　野宿経験タイプの特徴

それでは、長期層、再流入層、新規参入層という野宿経験タイプによって、ホームレスの属性に何らかの違いがあるのだろうか。以下、それぞれの主たる特徴について確認したい。

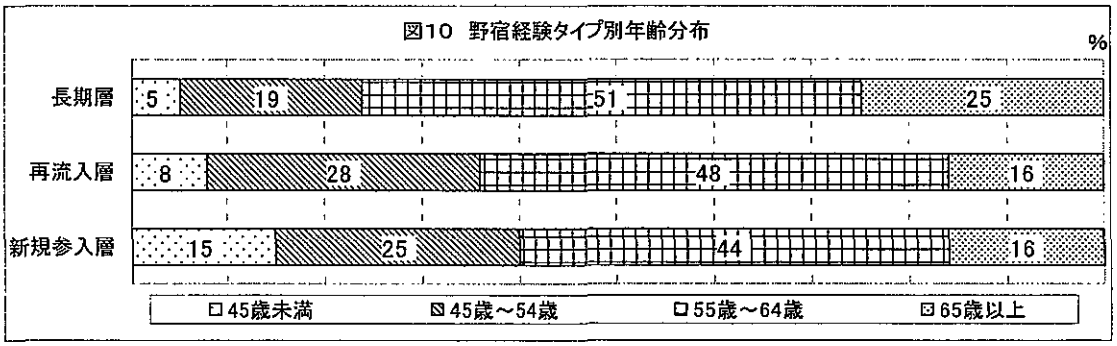
3－1　野宿経験タイプとホームレスの属性

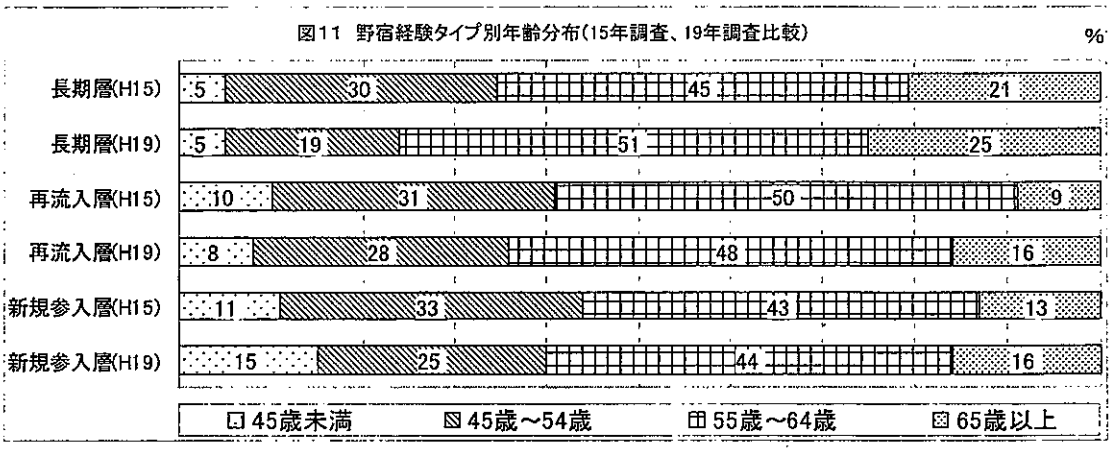
【年齢】

まず、野宿経験タイプ別の年齢分布を見ると（図 10）、新規参入層では、54 歳以下が 40%を占め（うち 45 歳未満が 15%）、65 歳以上は 16%となっている。また、再流入層では 54 歳以下が 36%であり（うち 45 歳未満は 8%）、65 歳以上は新規参入層と同じく 16%である。一方、長期層では、他の２層と比べて 65 歳以上の割合が 25%と高く、逆に 54 歳以下は 24%と低くなっている。

参考のため、前回調査との比較（ただし、前回調査のタイプ区分は５年を基準）で見ると、いずれのタイプも前回調査に比べ、65 歳以上の割合が高くなっており、このことから高齢化が長期層だけでなく、新規参入層にも及んでいることが指摘できる。また、長期層では最も割合の高い 55ー64 歳の年齢層が、前回調査よりもその割合が大きくなっていることから、長期層での高齢化は 65 歳以上で極端に進んだというよりは、55ー64 歳の割合の増加により進んだ形となっている。ところが、新規参入層と再流入層では、この年齢層の割合はほとんど変化がない。この二つの野宿経験タイプでは、前回調査に比べると、65 歳以上の割合の増加のほうが顕著である。また、新規参入層は 45 歳未満と 65 歳以上の両極で割合が増えている。ここから、高齢化の傾向は、確かにホームレスの長期化と関わっているが、それだけではなく高齢になって新規参入したり、再流入層の中にも存在していること、一方で、新規参入層の中に 45 歳未満の割合が増える傾向が認められた点にも注意する必要がある（図 11）。

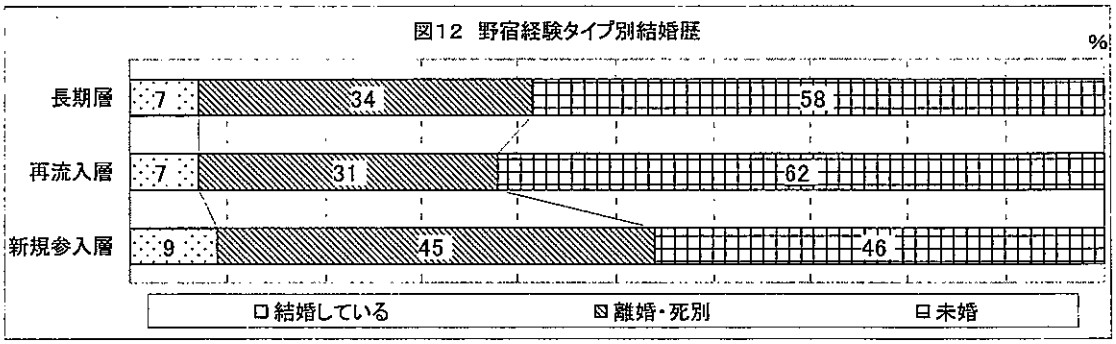
図10　野宿経験タイプ別年齢分布





【結婚歴・学歴】

野宿経験と結婚歴との関連を見てみると（図 12)、未婚の割合は再流入層で最も高く 62%であり、新規参入層では 46%となっている。新規参入層では、他の２層に比べ離婚・死別の割合が高くなっている。



また、学歴については、長期層、再流入層はそれぞれ 60%が中学校卒までの経歴であるが、新規参入層では、その割合が 47%と低く、高校卒の割合が 39%と他の２層に比べ高くなっている。（巻末クロス表参照）

【野宿経験タイプと職歴】

次に職歴と野宿経験タイプの関連を見てみよう。本調査ではホームレスになる直前の職（直前職）と一番長い期間就いた職（最長職）の２つの職業とその時の従業上の地位を聞いている。長期層、再流入層は直前職でも、最長職でも、建設技能従事者及び建設作業従事者が多く、この２つを合わせると半数近くの割合（直前職 53%、52%、最長職 44%、43%）となっている。このほかでは、サービスや販売に従事していた者が、長期層では直前職で 12%、最長職で 14%、再流入層でそれぞれ 13%、15%となっており、また、運輸・通信従事者が、長期層、再流入層ともに直前職４%、最長職６%となっている。（巻末クロス表参照）

これに対して新規参入層では、やはり建設技能従事者及び建設作業従事者は直前職・最長職ともに一番多い職業となっているものの、その割合は長期層・再流入層に比べ大幅に低い（直前職 39%、最長職 33%）。代わりに、サービスや販売に従事していた者は直前職で17%、最長職で20%であり、また、運輸・通信従事者は直前職で７%、最長職で８%であるなど他の２層より若干割合が高くなっており、職種が建設関係からその他へ分散している可能性がある。これは、前で述べた年齢構成の違いや、ホームレスへの参入時点での経済環境の違いを反映していると言えるかもしれない。また、直前職の変化を単純集計結果で見ても、建設業関係の仕事の割合が減り、それ以外の仕事の割合がやや増えていることから、ホームレス拡大時期の新規参入においては、建設業からのルートが大きかったが、現在では、多様な職種がそのルートとなり始めている可能性も考えられる。

直前職の従業上の地位を見ると、各層とも常勤の割合が高いが、その割合は新規参入層、再流入層、長期層の順で低くなる。長期層、再流入層では日雇が３割前後に達するが、新規参入層では、その割合が２割となっており日雇から直に野宿となった割合が比較的低い。長期層と再流入層は、職業においても建設技能・作業従事者への集中が大きかったのと同様に、従業上の地位でも常勤と日雇への集中が見られる。これに対して、新規参入層の直前職の地位は、常勤、経営者・会社役員、自営・家族従事者の日雇以外の雇用形態の割合が、他の２層より高くなっている。

ここで「臨時・パート・アルバイト」と「日雇」を「不安定職」と定義し、それ以外を「安定職」とすると、「不安定職」の割合は長期層で 48%、再流入層で 51%、新規参入層で 40%である。新規参入層では、他の２層に比べて不安定職からホームレスとなった者の割合は低くなっている。（表５）

表5　野宿経験タイプ別直前職の時の地位（%）

	経営者・会社役員	自営・家族従事者	常勤(正社員)	臨時・パート・アルバイト	日雇	その他	計
長期層	2	7	42	17	31	1	100
再流入層	1	5	43	22	29	1	100
新規参入層	3	9	47	20	20	1	100

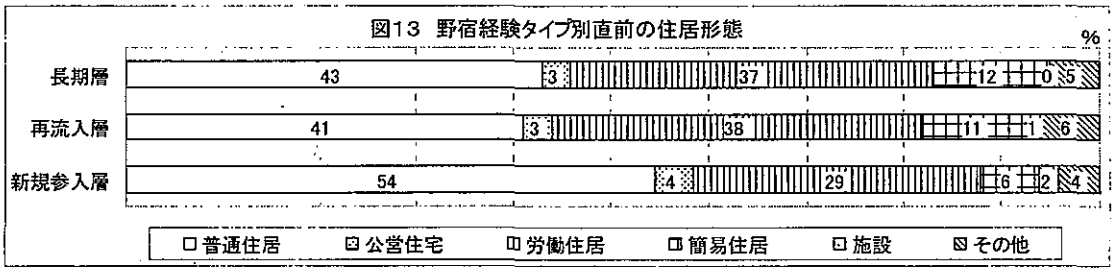
以上の傾向は、最長職でもほぼ同様に観察することができる。最長職で最も割合の高い常勤への集中度は、新規参入層が 66%であるのに対して、再流入層では 61%、長期層は 57%と低くなる。また、長期層、再流入層では最長職においても、日雇の割合が新規参入層に比べ高く、２割前後であった。なお、最長職の従業上の地位を先と同様に「安定職」「不安定職」に区分すると、不安定職の割合は長期層、再流入層がともに 32%であるのに対して、新規参入層では 20%である。（表６）

表6　野宿経験タイプ別最長職の時の地位（%）

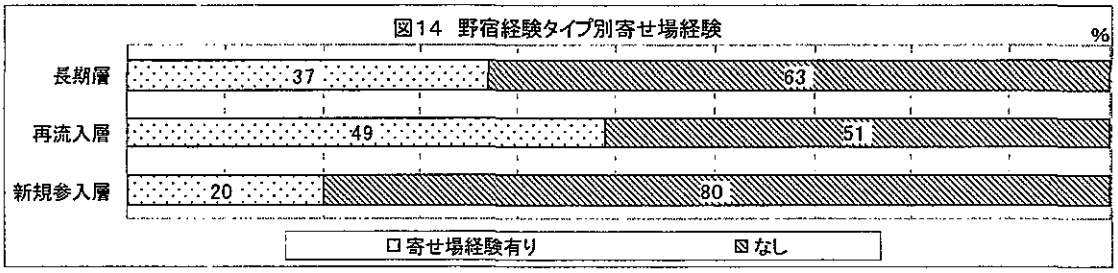
	経営者・会社役員	自営・家族従事者	常勤(正社員)	臨時・パート・アルバイト	日雇	その他	計
長期層	2	7	57	11	21	1	100
再流入層	0	5	61	13	19	1	100
新規参入層	4	9	66	8	12	1	100

【野宿経験タイプと住居形態】

路上生活の直前の住居形態についても、新規参入層と他の２層では、傾向が異なっている。新規参入層においては、持ち家、民間賃貸などの普通住居の割合が 54%、これに公営住宅等を加えると 58%となり、他の２層に比べ 10 ポイント以上も高い。これに対して、長期層や再流入層では、飯場や寮等の労働住居とドヤやビジネスホテル等の簡易住居などの割合が高くなっている。



なお、山谷等の「寄せ場」経験は、経験ありが全体で 34%であるが（巻末クロス集計表参照）、これを野宿経験タイプで見ると、再流入層でその割合が最も高く 49%とほぼ半分、長期層では 37%、新規参入層は 20%と低い。新規参入層の場合は、直前職の割合が分散している可能性があることから言ってうなずけるが、後の２つのタイプは建設関連職種の多さという共通点があるにもかかわらず、再流入層の方が寄せ場型の労働者の割合がやや高くなっている。このことから、短期的に路上と屋根のある場所を行き来している者を多く含む再流入層と寄せ場経験には何らかの関連があることも考えられる。（図 14）

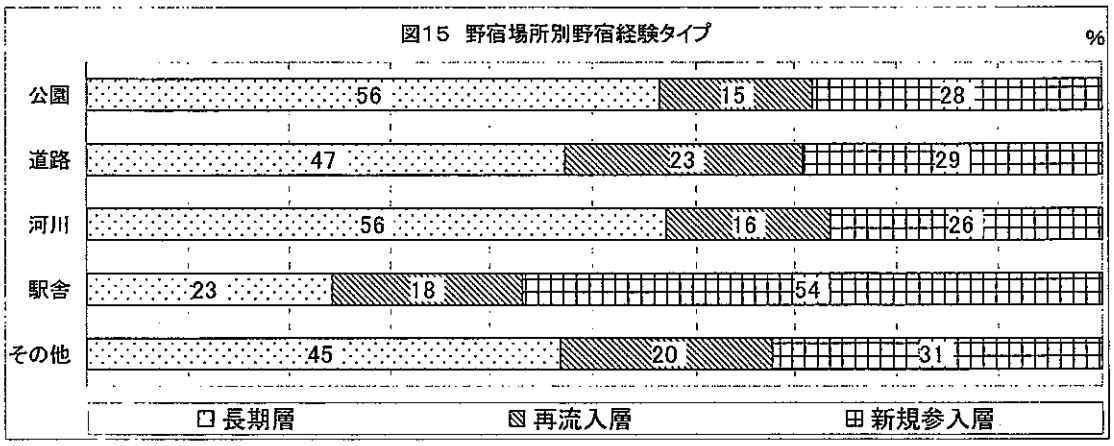


3－2　野宿経験タイプと路上生活の状況

【野宿の場所】

野宿経験タイプから路上生活を見てみよう。まず、野宿場所別に野宿経験タイプの分布を見てみると、公園、河川では長期層の割合が高く、駅舎では新規参入層の割合が高くなっている。また、再流入層はその行き来の便宜か、公園や河川ではなく、道路、その他の割合がやや高くなっており、野宿場所別で差異が見られる。

また、長期層ではテントや小屋の常設をしている割合が 62%であり、これに対して再流入層や新規参入層では段ボールや敷物程度で寝泊まりする者が半数近くを占めている。また、新規参入層では寝場所を作らないと答えた者が 11%存在した（巻末クロス表参照)。



さらに、野宿場所の選択については、いずれの野宿経験タイプも「なじみがある」とする割合が高くなっている。また、再流入層、長期層では「雑業がある」「寄せ場・手配師がいる」とする割合が、新規参入層に比べ高くなっている（巻末クロス表参照)。

【現在の仕事と収入】

長期層では、路上で収入を伴う仕事をしていると答えた者の割合が 80%であるのに対して、再流入層は 68%、新規参入層は 60%とやや低い（表７)。長期層の仕事の種類は、79%が廃品回収であり、他の２層でも廃品回収の割合が最も高いが、再流入層と新規参入層では建設日雇の割合がやや高くなっている。（表８）

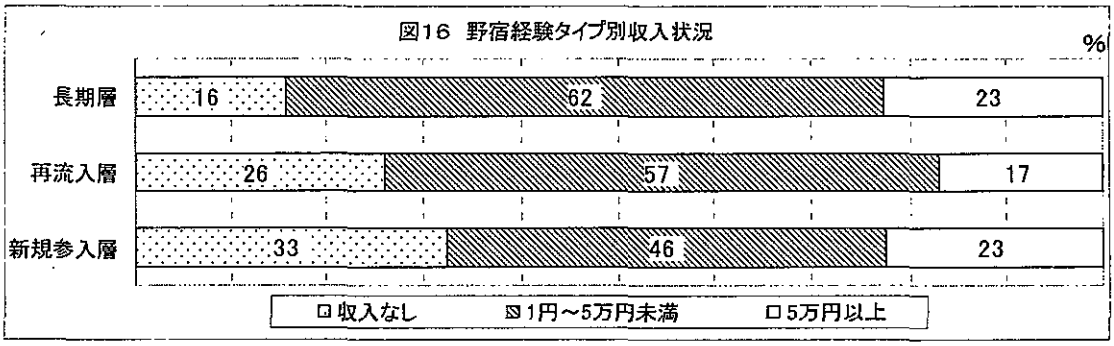
表7　野宿経験タイプ別収入を伴う仕事の有無（%）

	仕事していない	仕事している	計
長期層	20	80	100
再流入層	32	68	100
新規参入層	40	60	100

表8　野宿経験タイプ別現在の仕事の種類(複数回答)（%）

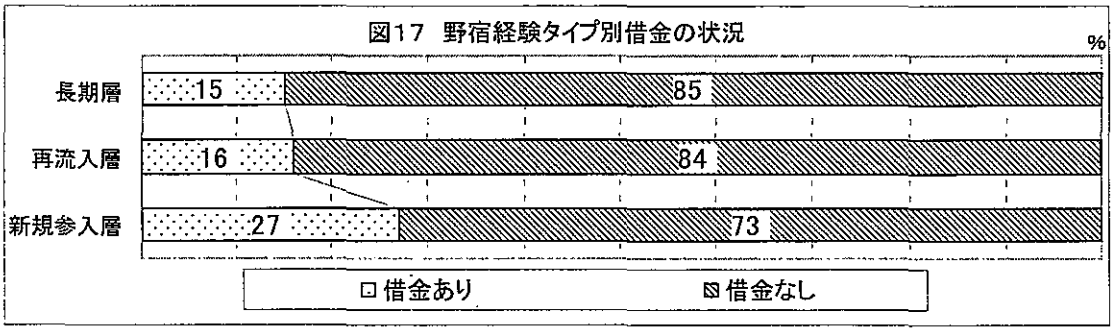
	建設日雇	廃品回収	運輸日雇	その他雑業	清掃	その他
長期層	12	79	1	8	7	7
再流入層	16	79	2	5	6	7
新規参入層	18	69	4	8	5	8

収入については、新規参入層、再流入層、長期層の順で収入なしの割合が低くなり、長期層では何らかの収入を確保している者が多くなっている。ただし、５万円以上の収入を得ている者の割合は、新規参入層と長期層で同じ程度の割合となっており、長期化が必ずしも収入の高さと結びついている訳ではないこともわかる。(図 16)



【借金の有無・野宿の理由】

借金の有無についても、野宿経験タイプによって異なっており、長期層、再流入層では、借金なしの割合が８割を超え、ありは15%程度であるが、新規参入層では、借金ありが27%と他の２層よりも高くなっている。これまで述べてきたように、新規参入層は、年齢階層がやや低く、多様な常用職種経験者を含んでいると考えられるが、これらの者のホームレス化の背後に、借金の存在があることも考えられる。



なお、野宿の理由については、巻末クロス表で見るように、野宿経験タイプによる大きな差異は見られない。強いて言えば、日雇の割合が高い長期層では「仕事が減った」(36%)や「ホテル、ドヤ代払えず」(6%)の割合が他の２層に比べて高いのに対して、新規参入層では「家賃が払えなくなった」(16%)の割合が高くなっている点が挙げられよう。また、借金を野宿の理由とする割合については、新規参入層で８%、長期層で７%となっているが、再流入層では若干低く４%となっている。

【健康状態と困っていること】

健康状態については、約半数が「悪いところがある」としており、また、その６割以上が「何も対処していない」としている(巻末単純集計表参照)。これは年齢階層、野宿経験タイプで変わらない。すなわち、「悪いところがある」としている割合を年齢階層別に見ると、45 歳未満は 44%であり、65 歳以上の 50%に比べてやや低い程度である。また、野宿経験タイプ別に見ると、長期層で 49%であるのに対して、新規参入層では 50%である。このことから、高齢化や長期化に関係なく、ホームレスになることと健康問題が一定の関係にあることが推測される。なお、対処法として、５万円以上の収入のある者は市販薬を利用する割合がやや高くなっている。(巻末クロス表参照)

また、本調査では、路上生活の生活水準を示す指標として「困っていること(複数回答)」を聞いている。これを野宿経験タイプ別に見ると、全ての層で「食べ物」「入浴・洗濯」の項目で困っているとする者の割合が高い。また、再流入層と新規参入層では「寝場所」「雨や寒さ」の項目で、困っているとする者の割合が高い。なお、「特に困っていることはない」と答えた割合が長期層でやや高いことにも注目したい。つまり、長期層は路上生活にある程度「順応」しており、新規参入層は順応度合いが少ないということが言えそうである。また、「孤独」を訴える割合は、新規参入者が最も高い。

